The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『兵部卿物語』の構造 ： 『狭衣』『小夜衣』との比較を通して
Author(s)	片岡, 利博
Citation	語文. 1979, 35, p. 34-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68651
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『兵部卿物語』の構造

――『狭衣』『小夜衣』との比較を通して――

片岡利博

一

続々群書類従に収められた『兵部卿物語』は三十頁にみたない小篇であるが、その文辞には、かなりの長文にわたって『狭衣』と酷似する個所が二ヶ所ある。重複をいとわず次に掲げるが、A・A′は既に三谷栄一氏が『物語文学史論』(注1)に示されたところである。

A、(イ)この姫君と聞えさするは、(ロ)帝の御弟故式部卿の宮の御世の末に(ハ)生れさせ給ひて、(ニ)程なく(ホ)宮失せ給ひにしかば、(ヘ)御形見にもと思して(ト)内に迎へさせ給ひつつ、宮たちと同じやうにて生ひ出でさせ給へり。(チ)このごろは(リ)十四五にもやならせ給ふらん、(ヌ)御かたち有様見奉らん人々はいかなるもののふなりとも和らぐ心は必ずつきぬべきを、宮は幼くより見なれ給ふに、幼き御ひとへ心にかかりて苦しきまで思ほししみつつ（六四〇頁下段10―19行）

A′、(イ)源氏の宮と聞ゆるは、(ロ)故先帝の御末の世に、(ハ)中納言の御息所の御腹に、類無くうつくしき女宮(ニ)生れ給へりしを、(ホ)今更のほだしと心苦しう思し育みし程に、宮の三つばかりになり給ひし程に、(ヘ)院も御息所もうち続き隠れさせ給ひにしかば、(ト)いと心苦しくて、(チ)斎宮やがて迎へ取り聞えさせ給ひて、中将と同じ心に思ひ聞えさせ給ふ。(リ)殿もまことの御むすめよりもやむごとなき方添ひて、思ひかしづき聞えさせ給へり。(ヌ)十に四つ五つ余らせ給へる御かたち有様、見奉らむ人はいかなるもののふなりとも和らぐ心は必ずつきぬべきを、(ル)中将の御心の中はことわりぞかし。（上巻一九二頁9行―一九三頁1行）

B、(イ)二葉より(ロ)同じはらからのやうにて生ひ出で給へば、(ハ)かかる心付き初め思ひ余る色を仄めかしても甲斐なきものの、(ニ)上にも類無き御志といひながら、この御事ばかりはさてあれともよも任せ給はじ、(ホ)世の人の思はん事もめづらしげなきやうにぞあるべきなど、(ヘ)とざまかうざま世のそしりを思ほすには、(ト)あるまじき事と御心よせ強ひて深く思ほしつつむにぞ、(チ)あやにくに心は砕けまさりつつ、(リ)御心細く眺めがちのみにて、とてもかくてもこの御事は御心にかなふまじきを、いかになずらへ給はん人だにあらばと思ほすにや、人知れぬ御忍びありきなども重なれど、御心とどむべき方なきに、いとど類無き人の御さまと、なほ、心は砕けまさりて、(ヌ)つひにいかなるさまにか身をなし果てんと心細き折がちなり。（六四一頁上段8行―下段2行）

B′、(イ)二葉より(ロ)露ばかり隔つる事なく生ひ立ち給ひて、親達を始め奉り、よその人々、帝・東宮も一つ妹背と思し召し掟てたるに、(ハ)「我は我とかかる心の付き初めて、思ひ侘び仄めかしても、甲斐なきものから、(ニ)あはれに思ひ交はし給へるに、思はずなる心のありけると思し疎まれこそせめ」と、(ホ)「大殿・宮なども、類無き御志といひながら、この御事は、さらばさてもあれとも、よに任せ給はじ、(ヘ)世の人の聞き思はむ事も、ゆかしげなくけしからずもあるべきかな」と、(ト)とざまかうざまに世のもどきなるべき事なれば、(チ)あるまじき事に深く思し取るにしもぞ、(リ)あやにくに心は砕けまさりつつ、

「つひにはいかなるさまにか身をもなし果てむ」と、心細き折がちなり。（上巻一八七頁1―10行）

A・Bは『兵部卿物語』を続々群書類従の本文により、A′・B′はA・Bに相応する『狭衣』の本文を日本古典全書（底本は「元和九年五月中旬　心也開板」の刊記をもつ古活字本。三谷栄一氏の分類によれば、巻一は第四系統、巻二・巻三は第三系統、巻四は第一系統に属する。[注2]）によって、読み易いように用字・句読を私に改変して、示した。A・A′およびB・B′の互いに似ていることは、一読すれば納得されると思うが、文章構造を比較するのに便利なように、それぞれに(イ)～(ル)の符号をつけた。

A・Bは、(ハ)(リ)(レ)(ツ)を欠き、(ホ)(タ)のように表現を抽象的にすることによって文辞を簡略化する、というように、総じてA′・B′を縮小した形になっているが、(ヌ)(ワ)(キ)のようにA′・B′にない語句が入っているところもある。(ワ)について、三谷栄一氏は前掲書の中で、A′の(ヲ)に続く、第一系統『狭衣』にだけ見られる本文、

我も幼くおはせし折は、互にかくのみ幼き人はめでたきものとのみ思しならひたるを、やう〳〵ものの心知りゆくまゝに、この様ならんを見ばや、さらざらんこそ生ける甲斐なかるべけれと、おぼししみにければ、かくいとすさまじき御心ながらも、自ら心にくきあたり〳〵を、いかにせん〳〵とのみ、もの歎しうやう〳〵なり給て……

を挙げられ、「兵部卿宮物語の前掲の終の部分（Aノ(ワ)）が、狭衣の掲げた例の終末の括孤の部分（右ニ掲ゲタトコロ）によって出来上ったとすれば、兵部卿宮物語のこの部分（A）は、第一系統によったものと断定せざるを得ない。[注3]」と述べておられるが、どうであろうか。(ホ)や(タ)の例を考慮すれば、この本文と(ワ)との類似も認めるべきかと思われるけれども、(ホ)(タ)の場合はその前後の句がやはりA・BとA′・B′とにおいて類似しているということを考えに入れる必要がある。つまり、(ホ)や(タ)を単独で比較すると、今問題の個所と同様、意味するところが似ているだけで措辞は随分異なっているといわねばならないが、(ニ)～(ヘ)、あるいは、(ヨ)～(ソ)というまとまりとして比較してみると、やはり両者はよく似ているのであって、そのために、Aの(ホ)はA′の(ホ)に、Bの(タ)はB′の(タ)に相当するということが、逆に認められるのではないか。ところが、(ワ)の場合は、そのあとが、「はかなき花・紅葉につけても……」というふうに、『狭衣』の本文（第一系統であれ、第四系統であれ）からは全く離れていってしまうのである。となると、三谷氏の掲げられた本文が(ワ)に相当するということは断定しにくくなってくる。(キ)についても、『狭衣』の本文から似たような意味のことを述べている個所（したがって、若干の共通する語句は当然ある）を指摘することはできるが、事情は(ワ)の場合と同様であって、今は、一応、(ワ)(キ)は『兵部卿物語』の独自の本文と見ておく。

そこで、A・A′、B・B′の句の出入りを整理してみると、次のようになる。

A―(イ)(ロ)　(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ)　(ヌ)(ル)(ヲ)(ワ)
A′―(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ)(リ)　(ル)(ヲ)　(カ)

B―(ヨ)(タ)　(ソ)　(ネ)(ナ)(ラ)(ム)(ウ)(キ)(ノ)
B′―(ヨ)(タ)(レ)(ソ)(ツ)(ネ)(ナ)(ラ)(ム)(ウ)　(ノ)

これを見ると分かるように、両者の間には句の出入りはあっても、句の配列が前後する個所はひとつもない。これは、措辞の類似もさることながら、それ以上にA・BとA′・B′との比較においては注目すべきことであると思う。

このこととともかかわるところがあるので、『狭衣』の異本の問題にふれたついでに、もう少したち入って考えるならば、A・Bは『狭衣』第一系統よりはむしろ第四系統の方にはるかに近い、といわねばならない。

まず(ヲ)を見てみる。AとA′とは、「人々」と「人」とのちがいだけで、あとは全く同じであるが、この部分が第一系統（日本古典文学大系の本文による）では、

A″、御かたちの、ほの見たてまつりけん人は、いかならん武士なりとも、やはらぐ心は必ずつきぬべきを（三六頁8―10行）

となっている。A′と比べると、A″は「有様」を欠いており、「見奉らむ人」が「ほの見奉りけん人」、「いかなる」が「いかならん」となっていて、Aからは遠くなる。

(ネ)においても、B′では「類無き御志」とあってBと一致するところが、第一系統では「ならびなき御心ざし」（三一頁1行）となっている。さらに、「よに任せ給はじ」から(ナ)(ラ)(ム)にかけて、BとB′とはかなりよく似た文辞になっているところであるのが、第一系統では次のようになっている。

B″、さらばさてもあれかし』とは、よに思さじ。何方につけても、いかばかり思し嘆かん。かた〴〵にあるまじき事」と、ふかく思ひ知り給ひにしも、あやにくぞ心の中は砕け優りつゝ（三一頁2―4行）

「任せ給はじ」と「思さじ」、「心」と「心の中」といった語句のちがいもさることながら、圏点を付けた部分がBやB′の(ナ)(ラ)とは全くちがっている。さらに、このちがいはこの部分のみのちがいにはおさまらない。というのは、Bの(ナ)「世の人の思はん事もめづらしげなきやうにぞあるべきなど」に相当する句は、実は第一系統の本文にもあるのである。

B″、世の人聞き思はん事も、むげに思ひやりなくうたてあるべし。（三〇頁16行―三一頁1行）

がそれであるが、この句は、第一系統の本文では(ツ)と(ネ)の間に位置しているのである。すなわち、さきに見たように、BとB′とは句の配列において、

B―(ヨ)(タ)　(ソ)　(ネ)(ナ)(ラ)(ム)

B′―(ヨ)(タ)(レ)(ソ)(ツ)(ネ)(ナ)(ラ)(ム)

というふうに一致していたのが、第一系統では、

B″―(ヨ)(タ)(レ)(ソ)(ツ)(ナ)(ネ)〇〇(ム)

というふうに、句が前後する形になるのである。

本稿の問題からはやや外れるのであるが、三谷氏がいわれるように、『兵部卿物語』が『狭衣』のどんな本に依拠したかは、「狭衣物語伝本研究上看過し難い問題」（注4）であると思うので、ここで三谷氏の所説と私見との異同を整理しておく。

一、『兵部卿物語』のAの部分が『狭衣』の本文に似ていると見る点では三谷氏の御指摘と一致する。

一、私はさらにBの部分も『狭衣』の本文に似ていると見る。

一、三谷氏は、Aの(ワ)を「我も幼くおはせし折は……やう〳〵なり給て」（前掲）によったとすれば、Aは第一系統の『狭衣』によって作られたと断言し得る、とされるのに対し、私は、Aの(ワ)は

『兵部卿物語』の独自の本文である、とする点で、氏と異なる。したがって、Aが第一系統の『狭衣』によったとする根拠は、私の場合は全くない。

一、私は、A・Bに相当する『狭衣』の第一系統・第四系統の本文を比較し、措辞および句の配列の二点から、第一系統よりも第四系統の方が『兵部卿物語』の本文に近いと考える。

さて、この第四系統『狭衣』の本文は、さらに、中田剛直氏の『校本狭衣物語・巻一』(注5)によって他の本と比べてみても、そこにあげられたどの本よりもA・Bに近いことが知られるのであるが、この第四系統というのは近世の流布本である。一方、『兵部卿物語』の成立は、内部徴証のみによるきわめて不確かな臆測といわざるを得ないが、鎌倉時代頃とする通説(注6)に従うのがおだやかであろう。そうなると、両者の関係については確かなことはほとんどいえなくなるのであるが、さきに見たような、A・BとA′・B′とのきわめて近い類似から、次のようなことぐらいは結論し得るかと思う。

続々群書類従所収の『兵部卿物語』のA・Bの本文(但し、これは成立当初のままの本文ではなくて大幅に改変されたものかもしれない)は、『狭衣』第四系統に属する近世流布本と同じ本文、あるいはそれにきわめて近い本文をもつ『狭衣』のA′・B′の部分をもとにして、A′・B′の一部を、全体としての意味に変動を生じない程度に文辞を縮小したり省略したりして成立したものである。なお、このA・Bの文をつくる際に、A′・B′の模倣ということはかなり意図的になされたとみえて、(ヰ)はさきに述べたように一応は『兵部卿物語』の独自の本文と見られるにもかかわらず、その末尾で「なほ、心は砕けまさりて」というふうに(ウ)の末尾の措辞をくり返して(ノ)に接続し、B′における(ウ)から(ノ)へのはこびに似せたりしている点に、そのことがうかがえるかと思う。

二

前節に見たような長文にわたる『兵部卿物語』と『狭衣』との文辞の類似は、当然のことながら、さらに両物語の構造の類似にもおよぶ。それは、山岸徳平氏が「構想に関しても、最初の恋は狭衣と源氏宮に類し」(注7)と述べておられることとも一部重なるのであるが、「構想」といわず、あえて「構造」といったのは、今少し物語の展開全体を見た上で両者の比較を試みようと思うからであるが、まずは、式部卿宮の姫君の物語からみてゆくことにする。

A・BとA′・B′との類似から、兵部卿宮と式部卿宮の姫君(以下、「宮姫君」と称する)との関係が、狭衣(以下、物語名『狭衣』に対し、主人公名を狭衣と記す)と源氏宮との関係に似た設定をされていることは明らかであるが、さらに、この宮姫君は「前斎院の御服の事ありておりゐさせ給ひければ、つかせ給ふべき姫宮たちもおはせねば」(六四五頁下段17行)ということで、急遽、斎院に卜定される。一方、『狭衣』においても、巻二之下で、斎院であった一条院の后宮の姫君が、御代替り・一条院崩御にともなって斎院をおりたため、「居させ給ふべき女宮達、このごろおはしまさざりけり」(上巻三六二頁7行)ということで、源氏宮が斎院になる、というように両物語とも同じ展開をたどる。

また、斎院卜定による両物語の主人公の悲歎を語る条も互いに似ている。

C、あまり心の乱るる折々は、せめて御簾の外までもおはして、はかなし事にてものたまふを慰めにて過ぐい給ひけるを、かく定まり給ひなば一日もながらふべしとも思されず。（六四六頁上段2―5行）

C′、思ひ余る折々は、気近き程にて、心の中をもうちかすめ、忍ばぬ涙を洩らし出づるに、慰むとはなかりつれど、万づに有り難き御有様に日馴るるに、多くの物思ひの紛れともなりつるを、時々など参りて、いと神々しく余所々々しからむ御もてなしにては、いかでかは限りあらむ命も長らへ遣るべからむ。（上巻三六六頁8―12行）

ここでは、AとA′や、BとB′のような措辞の類似は見られないが、CとC′とは互いに相応する句を、配列を同じくして、もっており、あたかもCはC′の曲折した言いまわしをパラフレーズしたようである。(ヤ)は、CとC′とで意味するところが異なるが、これは、『狭衣』の場合、巻一之上で狭衣が源氏宮に恋心を告白してしまっているのに対し、『兵部卿物語』では、兵部卿宮の恋は秘められたままになっている、というちがいからくるのであろうが、(ク)(ヤ)(マ)というまとりを比較すればま、Cの(ヤ)とC′の(ヤ)とは相応すると見てよいと思う。

『兵部卿物語』に宮姫君が登場するのは、以上あげてきた個所以外にはない。したがって、『兵部卿物語』の宮姫君に関する叙述はすべて『狭衣』の源氏宮の物語を踏襲したと見てよい。

三

ところで、『兵部卿物語』の叙述の大半をしめるのは兵部卿宮と按察使の君（＝西の京の女）との恋物語であるが、こちらのほうについては、黒川春村は「大むねは、かの孝標朝臣の女の、よはの寝覚の作意をとりて、つくりかへし物なり」[注8]といい、山岸徳平氏は「西の京の女との関係は源氏と夕顔とを思はせる点がある」[注9]といわれる。さらに、「男は兵部卿宮、女は按察使大納言の娘で、身寄りのない女、女が宮仕えのために身をかくすその前後の模様から、再会に至る事情まで『小夜衣』とそっくり同じである」[注10]とする小木喬氏、「『若紫』の北山の垣間見や、源氏が藤壺の面影に似た紫上を見出す趣向の模倣が見られる」[注11]とする岡一男氏などがあって、確かにどれも部分的には似たところがある。私見では、『狭衣』の飛鳥井女君に似たところもあるが、宮姫君の場合のようにはっきりと『狭衣』を踏襲したというようなことはいえない。周知のように、『狭衣』や『寝覚』は『源氏物語』の強い影響下に成った作品である。そのことは『小夜衣』についても同じであるが、『小夜衣』の場合はさらに『狭衣』からもきわめて強い影響をうけている[注12]。このような場合、単に趣向が似ているということだけから、これらのうちの特定の作品と『兵部卿物語』との関係を、「模倣」というような著作レベルの問題として扱うのはどうであろう。まして、高貴な男主人公が伏せ屋に美女を見出して恋する、とか、主人公が意にそわぬ結婚を強いられる、とかいう趣向は、物語には好んでとりあげられるもののようであり、散逸物語の中にもそういう類いのものはいくらもあったにちがいなく、現存するわずかな物語だけを対象に考えてかたづく問題とも思えない。「現象的影響論の次元を超えて、物語の源初的根深さに由来するとみる視点」[注13]なども、こうした場合、十分に尊重されるべきであろう。

しかしながら、模倣とか影響とかいうことを抜きにして、単に類似点の多寡ということだけを問うなら、小木氏の指摘された『小夜衣』は、按察使の君の物語に似た点がかなり多いといってよい。そこで、以下、『小夜衣』[注14]との比較を通して『兵部卿物語』の構造を

考えてみたい。

本節は、『兵部卿物語』の構造を明らかにするために『小夜衣』を、いわば援用するのであって、著作事情にかかわる所謂「構想論」ではない。したがって、『小夜衣』と『兵部卿物語』との主人公の名称の一致ということはあまり重要ではなくなるので、小木氏のいわれる「身寄りのない女、女が宮仕えのために身をかくすその前後の模様から再会に至る事情」について、もう少し詳しく両物語の共通点を列挙してみると、(注15)

a、不遇の女君を主人公が見出して通う。
b、主人公が別の女と結婚させられる。
c、主人公が女君のもとへ通わなくなる。
d、女君に別の経路から誘いがあって、女君は住まいを変える。
e、主人公が女君に再会する。

という五点に整理されるかと思う。今、論述の便宜上、五つの事件を『小夜衣』の展開に即してならべてみたのであるが、そこには明らかに、＜出会い＞a→＜障碍＞b→＜途絶え＞c→＜失踪＞d→＜再会＞e、という筋が見てとれる。これは鎌倉・室町期の多くの物語に見られる類型的な筋であるが、一方の『兵部卿物語』も同様の筋をもつ。すなわち、『小夜衣』と『兵部卿物語』とは、右にみた五つの事件を共有するだけでなく、＜出会い＞から＜再会＞にいたる筋も一致するのである。小木氏が「そっくり同じである」といわれたのも肯けるのであるが、注意すべきは、『兵部卿物語』では、右の五つの事件が、acbdeという順番に出来することである。『小夜衣』とちがうのはbの位置である。そこで、このbの前後を両物語で比較してみる。

『小夜衣』では、＜出会い＞ののち、宮は足繁く女君のもとに通う（a）が、「院には宮のかくはるばるの御ありきを心苦しく思し召して、いかにもして思し移る御心もがな」（三六頁11行―三七頁1行）と案じたすえ、関白の中君との結婚（b）がもち出される。このため、宮は「心ともあらずながら、関守強きかたとて、おぼろけにも山里へはおはしまさず」（五二頁10―11行）なってしまう（c）のである。ここでは、cの原因はb、bの原因はa、というように、a→b→cが因果関係の一本の筋で連なっている。

『兵部卿物語』では、aとcの間に、前節に見た「宮姫君の斎院卜定」という事件が入っている。これを歎く宮の心情もすでに見たとおりで、そののち宮は「御物思ひに、今はなかなかうち籠りつつ、内にもをさをさ参り給はず、御里にのみおはして、よとともに一人眺め明かし暮ら」（六四六頁下段16～18行）すようになって、女君のもとへ通わなくなる（c）のである。bはそのあとに出てくるのであって、宮のそんな沈みきった様子を案じた帝が「かかる人（＝妻）もおはせねば、御心もおのづからあくがるるわざなれば、これなんいとよかるべき」（六四七頁上段9―10行）という判断のもとに右大臣の娘と結婚させる（b）ことになる。したがって、『兵部卿物語』の場合、aとbの間には因果関係はなく、bとcの間は、『小夜衣』の場合とは逆に、むしろcがbの原因となっているという形である。さらにこちらは、bがdともかかわってくる。宮の足が途絶えた（c）女君に、さる人が「右の大臣の姫君、兵部卿の宮へ参らせ給ふは、なかなか内参りなどいへどかかる御ひびきはささぎきもなかりしが、上臈女房になるべき人、いま一人二人加へさせ給ふべしとて、かなたこなた尋ね給ふに、御いたはしくともこの姫君を出し奉

りなんや」（六四七頁下段15行―六四八頁上段1行）と誘いかける（d）。『小夜衣』の場合、この「誘い」の部分は父親からの誘いになっている。

以上を整理すれば、『兵部卿物語』は、〈出会い〉a→〈障碍〉宮姫君の斎院卜定による主人公の悲歎→〈途絶え〉c→〈失踪〉bd→〈再会〉e、となる。

『小夜衣』とちがうのは、〈障碍〉と〈失踪〉とである。〈障碍〉については、『小夜衣』の場合は、父院による強制的な結婚という外的障碍であった。ところが、『兵部卿物語』では、〈障碍〉はほかならぬ宮自身の心である。このちがいは、単にこの〈障碍〉の部分のみのちがいを指摘するだけでは不十分であろう。すなわち、『小夜衣』の主人公は女君をこよなく愛していた。女君自身の美徳が強く主人公の心を魅きつけていたのである。したがって、二人の仲を裂く〈障碍〉は外的なものに求められねばならなかった。一方、『兵部卿物語』の主人公は、女君を愛していないわけではないが、その愛は女君自身の美徳によるものではなく、「明け暮れ思ひ焦がれ給ふ人（＝宮姫君）の御さまにふと思ひ出られ」（六四二頁上段18―19行）たことからくる愛、形代としての愛であった。「かかる下が下の品まで尋ね出で、主知らぬ恋路に迷はんもいとあまりなる心の程かな」（六四三頁上段10―12行）と、女君に傾斜してゆくおのれの心を否定しつつ、否定しきれなかったのは宮姫君への秘めた思いにほかならなかった。按察使の君との仲を裂いた〈障碍〉が、『兵部卿物語』の場合、宮姫君の斎院卜定による主人公の悲歎に求められたのはそのためである。

もう一つのちがい〈失踪〉も、この両主人公の女君に対する愛のあり方のちがいとかかわっている。『小夜衣』の女君は、宰相の君（女君を主人公に紹介した人物）を通して、宮の足が途絶えるに至った事情を熟知している。知っていながら、否、知っているからこそ、「今はとて花やかなること（＝関白の婿になったこと）に定まり居給ひて、かくかれがれなる御心に、なかなかかくて跡絶えなんは、人もおのづから思し出る折々も有りぬべきを」（七二頁6―8行）と考えて身をひくのである。したがって、女君の行く先は父親のもとという、一応は無難な所になっている。しかるに、『兵部卿物語』の女君は、こともあろうに、主人公の新妻のもとに出仕するという悲劇的な展開をたどる。女君は、主人公の名前すら知らされていなかったからである。宮は、「なにの中将」（六四三頁上段15行・六四四頁上段1行など）という偽名を用い、「帰るさの路をも人に知られずしてつつみ給ふ」（六四九頁上段6―7行）。なぜ宮が素姓を隠すのかは明記されていないが、さきに引いた「かかる下が下の品まで」云々という顧慮と関係があるのであろう。ともあれ、宮は、『小夜衣』の主人公のようには、女君を愛していたのではない。そのちがいが、両物語の〈失踪〉の様相を異なるものにしたのであり、さらに〈再会〉ののち、『小夜衣』はハッピーエンドになるのに対し、『兵部卿物語』の女君は再三の失踪をくり返すというちがいも生むのである。

このように見てくると、『小夜衣』と『兵部卿物語』とは、a～eの事件を共有していて、かつ筋も似ており、一見「そっくり同じ」にみえるけれども、実は根本的に異なるものであることが分かる。物語においてどういう思想が語られるか、というようなことがさほど重要であるとは、私は思わないが、物語というものの叙述がある

思想のもとに求心的に進展していることは確かであって、今、その思想を「主題」とよぶなら、『小夜衣』の主題は「愛の賞揚」であり、『兵部卿物語』の主題は「愛の不如意」ということになろう。この主題のちがいは、右にみてきた両物語の展開のちがいにほかならない。『小夜衣』においては、宮と女君の愛は絶対的であり、これを賞揚すべく、叙述は一本の筋の上をまっすぐに進んでゆく。その構造は単純といえば単純である。一方、『兵部卿物語』においては、宮と女君の愛、それ自体が追求されるべきものではなくて、宮姫君に対する主人公のかなわぬ思いの故にその愛が歪められてゆく有様を描くべく、叙述が進展してゆく。按察使の君の物語は宮姫君の物語を前提としてのみ成立可能な物語であって、『兵部卿物語』の構造は〈重層的〉といってよいかと思う。

四

『兵部卿物語』に見られる、この〈重層的構造〉は、実は『狭衣』の特色でもある。『狭衣』の構造の詳細は明らかでないところもあるが、ごくおおまかに言って、源氏宮、飛鳥井女君、女二宮、一品宮、宰相中将妹君を女主人公とする五つの物語が想定される。従来、はじめの三つの物語についてはよく論じられており、飛鳥井女君の物語と女二宮の物語との展開に源氏宮の物語がかかわっていることが明らかにされている。[注16] さらに、飛鳥井女君の物語・女二宮の物語と源氏宮の物語の間にみられる関係と同様の関係が、一品宮の物語と女二宮の物語の間にもみられる、と私は考えており、かつて述べたことがある。[注17] 宰相中将妹君の物語については、見解が分かれていて難しいので、ここでは触れずにおくが、『狭衣』は、源氏宮の物語を前提として飛鳥井女君の物語・女二宮の物語が成立しており、さらに、女二宮の物語を前提として一品宮の物語が成立しているという、少くとも三重の〈重層的構造〉をもつ。この〈重層的構造〉をもう少し補足説明すると、それは単に複数の物語が平行して語られるということではなくて、前提となる物語の展開そのものが、他方の物語の筋の形成に深くかかわっているような構造をいうのであって、たとえば、女二宮の物語において、狭衣は女二宮の降嫁を強く拒むが、そのことが一品宮の物語においては「年ごろもこの御事(=一品宮)を深う思ひて、いと僻々しきまで思し離るる事(=女二宮の降嫁を拒んだこと)もあるなりけり」(下巻五九頁3―4行)という、堀川大殿の誤解をまねき、一品宮の降嫁に進展してゆく、といった類いである。こうした〈重層的構造〉は必然的に筋を複雑に入り組んだものにしていくのであって、「結構の上に工夫を凝し、変化に富みて、しかも統一の妙ある」[注18]という特性を生み出すが、『狭衣』においてそうした構造の基礎になったのが、A′・B′にみられる狭衣と源氏宮との義兄妹という設定であった。「二葉より露ばかり隔つることなく」育てられたために宮をいつしか愛するようになり、義兄妹であるが故に世の聞こえがはばかられて思いをとげ得ない、というこの設定が、主人公狭衣の行動を因循姑息にし、他の女性との愛を歪んだものにしてゆく。その過程を描くのが、飛鳥井女君の物語であり、女二宮の物語であるが、今それを述べる余裕はない。女二宮の悲劇を語り終えたあとにある次の叙述を引いて、説明に代える。

「いみじといへど、斯ばかりなる人はあらじかし」と、(源氏宮ヲ)見奉るたびごとには、ひとかたの心惑ひのみせらるれば、「いでや。かかれば、

あまたの人（＝飛鳥井女君ヤ女二宮）をもいたづらになしつるぞかし。つひには我が身もはかばかしき事もあるまじきぞかし」と思へば、涙は例のこぼれ給ひぬ。（上巻三四〇頁3―5行）

『兵部卿物語』の兵部卿宮と宮姫君との関係は、はじめにみたように、その文辞にいたるまで、『狭衣』の狭衣と源氏宮との関係を踏襲したものであった。なるほど、この物語の大半をしめる按察使の君の物語は『狭衣』よりも『小夜衣』にはるかによく似ているといわねばならない。しかし、A・Bを『狭衣』から大胆にとり入れることで、全体としては、『兵部卿物語』は『小夜衣』の単純な構造と袂をわかち、『狭衣』的ともいうべき〈重層的構造〉をもつ物語となり得たと見られる。くり返し言うが、これは『小夜衣』と『兵部卿物語』との間に著作上の直接的関係があるというのではない。あるかもしれないし、ないかもしれない。先にも述べたように、ごく限られた伝本の範囲内でそういう著作レベルの問題を扱うことはきわめて難しい。私が本稿で述べたかったのは、多分に類型化し、その価値を疑われて鎌倉・室町物語と一括され、殆ど無視されかねない一群の物語の中に、『狭衣』の基本構造を見抜き、それを大胆にとり入れて、ささやかながら独自の世界をつくり出している作品があった、ということである。

注(1) 『物語文学史論・新訂版』（昭40・有精堂）二四九頁
注(2) 『狭衣物語』（日本古典文学大系79・昭40・岩波書店）五三九頁
注(3) 注(1)に同じ
注(4) 注(1)に同じ、二五〇頁
注(5) 『校本狭衣物語巻一』（昭51・桜楓社）
注(6) なお、室町中期の作とする黒川春村の説（『古物語類字鈔』）もあることを付記しておく。
注(7) 『日本文学書目解説㈢鎌倉時代（下）』（岩波講座日本文学・昭7・岩波書店）五四頁
注(8) 『古物語類字鈔』（『物語草子目録・前篇』所収・昭12・大岡山書店）一一四頁
注(9) 注(7)に同じ
注(10) 『鎌倉時代物語の研究』（昭36・東宝書房）二四頁
注(11) 『源氏物語事典』（昭39・春秋社）四一六頁
注(12) このことについては、後藤丹治氏「異本堤中納言と小夜ごろも」（『国語と国文学』昭3・5）を参照されたい。
注(13) 神野藤昭夫氏「『しのびね物語』の位相――物語史変貌の一軌跡――」（『早稲田大学・国文学研究』昭53・6）
注(14) 本文は、松尾聰氏『小夜衣』（昭32・古典文庫）により、引用に際しては、用字・句読を私に改変した。
注(15) 『異本堤中納言物語』は『小夜衣』と同一の物語であるが、女主人公按察使大納言の女は前者では「堤中納言の女」となっているという。このことからもわかるように、登場人物の名称は、構造を考える際にはあまり問題にならないのがふつうである。
注(16) 森一郎氏「狭衣物語の方法――狭衣物語・覚え書き――」（『国文学攷』昭33・3）、鶴賀礼伊子氏「狭衣物語の構成について」（『国文』昭43・1）、伊藤扶佐子氏「狭衣物語研究――二人の女君を中心として――」（『東京女子大学・日本文学』昭43・3）など
注(17) 「『狭衣』の一品宮――構造論の試み――」（『語文』昭52・6）
注(18) 藤岡作太郎氏『国文学全史・平安朝篇』（明38・開成館）五二八頁

（昭和五十三年十月三十日提出）